（書評）

『異質の光』―糸賀一雄の魂と思想―

髙谷　清 著　大月書店　2005年4月

小坂　淳子

Junko Kosaka

2005年9月30日受理

福祉の市場化が進められる中、糸賀一雄の思想を紹介するこの本の今日的意義は大きい。

糸賀一雄は重症心身障害児施設「びわこ学園」を創設した人である。発達保障、発達権などの発達理論を明らかにし、法律の整備やその必要性を説いて、国の福祉行政に大きな影響を与えた。恩恵の対象ですらなかった重症心身障害児に光をあて、福祉の思想を転換させた糸賀一雄の「こころ」と「事業」と「思想」は何だったのか。それらは、福祉の原点ともいうもので、決して過去のものではなく、読むものにとって「今」を考えさせるものになる。

糸賀一雄の有名な言葉である「この子らを世の光に」はどのようにして生まれたのだろうか。

糸賀一雄は、重度の障害がある子どもたちに相手と共感する気持ちがあることを知り、そこに自己を表現しようとしている姿を見出す。我々もその一端をビデオ『夜明け前の子どもたち』で知ることができる。

人は一人では生きていけない。人と人との関係の中で生きている。重い障害を持つ子どもは親や兄弟、施設の職員など、自分をめぐる人たちとの共同作業でしか生きられない。そうして自己実現を行う。それは生きることと直結し、他者を手段とするものではない。他者を他者実現させるのである。そこには「勝ち組」も「負け組」も存在しない。

このように、重い障害を持つ子どもは他者の自己実現につながるようなかかわり方をしている。人間の存在の根本は人と人との関係にある。その関係とは「自己実現」ではなく、「他者実現」である。これが人間と人間の人格的関係といえるものである。「他者実現」がまた「自己実現」になる関係である。これらの事を子どもたちの中に見出して、その感動を「この子らを世の光に」と表現する。これは、「異質の光」のように見えるが、誰もが持つ「普遍の光」である。

小児科医で元第一びわこ学園の園長である著者は、この著書に三つの方法を取り入れている。ひとつは関係者への綿密な聞きとりである。糸賀一雄は56歳で亡くなるが、存命なら91歳である。その時代を共に生きた方々への直接可能な最後の聞きとりになる時間かもしれない。

二つ目は膨大な資料を渉猟してまとめている点である。糸賀の生きた時代は戦争とは無関係ではいられなかった。京都学派と呼ばれる当時の学者たちの戦争へのかかわりについても資料を丹念に紹介している。学園設立、発展の関係者しか知りえないような資料も集められている。

三つ目は、丁寧な取材に歴史真相の記述とそこから著者が想定したフィクションの部分を絡ませる方法をとっていることである。実際の人物を登場させ、その場を再現する手法は、過去の出来事に臨場感をもたせている。読者は、そのときの歓喜や苦悩を手に取るように理解できるからである。関係者が生存されているだけにまるで違うイメージは描きにくいと思う。

発達保障とは、どんな重い障害をもって生まれた子どもたちでも発達をする。したがって、その発達を保障しなければならないという考え方である。しかし、この考え方は、当時の対象者理解を転換させるものであり、様々な妨害が行われた。にもかかわらず糸賀はそれを支持し、守り、発展させていく事に障害児教育の未来を託している。

読者を熱くさせるところは、混沌とした時代の流れのなかで糸賀一雄の真実を見る目である。仕事は一人ではできない。糸賀一雄のいる場に志のあるものが集まってきているような気がする。そうではなくて、糸賀一雄の人格や思いが人を育てたのかもしれない。

貴重な証言・資料を集めた本書は、糸賀一雄と同じ道を歩かれた著者だから書けたと本として福祉を学ぶ学生・卒業生に是非紹介したい一冊である。

（こさか　じゅんこ　本学教授）